

【登場人物表】

夏丘映未(26) 会社員

夏丘映未(11) 小学五年生

天使(見た目20代) 見た目悪魔

須藤和希(26) 映未の同期社員

新川綾音(22) 新入社員

木場優香(26) 映美の同期社員

夏丘きぬゑ(85・70) 映未の祖母

夏丘幸枝(55・40) 映未の母

夏丘繁隆(57) 映未の父

池本輝夫(55) 映未の上司 部長

村野 勝(43) 映未の上司 課長

その他の若手社員

山本栄治(25) 水野和孝(25)

津田正之(24) 中尾美和(24)

住田あかり(11) 映未の小5の時の友人

佐々木堅斗(11) 映未の小5の時の友人

怪しい男 (30歳前後)

警察官A・警察官B

タクシー運転手

○住宅街 道（日中）（映未の夢の中）

息を切らして必死で走る小学生の夏丘

映未（二）

○小学校の教室 日替わり（日中）

5年1組、新年度始業式の日。

あかり「えいみちゃん！」

映未に走り寄る住田あかり（二）

映未（二）「あかりちゃん！やっと一緒のクラス
になれたあ！」

手を取り合い跳ねて喜ぶ二人。

○小学校の教室 日替わり（日中）

5年1組、席替えくじ引き中。

映未の手に「18」と書かれた紙切れ。

黒板に書かれた席番号を確認後、振り返り、その席が佐々木堅斗（二）の隣とわかり、胸が高鳴る映未。

○映未の実家 日替わり（朝）

二階からパジャマ姿で駆け下りてきた映未（二）そのまま窓際に駆け寄り、

映未「晴れた！嘘みたいに晴れた！！」

リビングには遠足用のリュック。

映未「お母さん！絶対雨って言ったのに晴れたよ！（台所に向かって叫ぶ）」

突然映未めがけて白いインコが飛んできて目の前に白い羽根が舞い散る。

映未「・・・！」
（夢終わり）

○映未のアパート（朝）

スマホのアラーム音が鳴っている。

小ざっぱりと片付いたシンプルな部屋。

夏丘映未（20）目を覚ましアラームを止めて起き上がる。カーテンと窓を開け晴れた空に目を細める。

心地よい5月の風が前髪を揺らす。

大きく息を吸い込み、

映未「今日も一日平穏に過ごせますように」
少し不安顔で青い空に手を合わせる。

部屋の棚の隅っこの古い宝石箱に年季の入った羽根型のシルバーのチャーム。

タイトル「その天使を呼ぶとき」

○恵比寿商事本社 入口周辺く中（朝）

映未、シンプルなパンツスーツで出勤してくる。

須藤「おう、夏丘！」

同期の営業マン、須藤和希（29）が後ろから元気よく映未に声をかける。

二人歩きながら、

映未「おう、おはよ（愛想無く）」

須藤「ういっす！お前って相変わらず朝は眠そうな顔してんな。起きてるか？」

映未のほったたをつつく須藤。

それを振り払って、真顔で返す。

映未「起きてるし。朝イチからトップギア入ってる方がおかしいわ」

須藤「おうよ！今日も朝からエンジン全開！

絶好調よ！」

映未「（呆れて）須藤はほんと、いつも朝っぱらから元気だね」

須藤「おう。元気だけが取り柄だわ。って、誰が元気だけだよ！他に取り柄ないのかつつの！」

映未「はいはい」

須藤「おい、はいはいってなんだよお！」

映未「私は至っていつも通り平常運転、飛ばさないし遅延もしない。祭りがあっても臨時便は出さない」

須藤「何それ？路線バス目線？」

映未「須藤がエンジン全開って言うから」

須藤「夏丘らしい経営理念だな」

映未、須藤の襟元を見て、

映未「ちょっと待って」

須藤の腕を掴んで立ち止まり、

映未「またネクタイ、襟からはみ出てるよ」

須藤「え？ほんとにいい？」

映未「営業なのにちゃんとして！ちょっとは成

長しなさいよ」

映未、はみ出したネクタイを押し込む。

襟元を覗き込むとうとする須藤との距離感に紅潮するのを感じ、足早にエレベーターに乗り込む映未。

須藤「おー、サンキュー！ねーねー、寝癖は大

丈夫かな？」

無邪気に追いかけて一緒に乗り込む須藤。

○同 営業部 同時刻

須藤「おはようございます！」

映未「おはようございます」

新川「おはようございます！」

映未の姿を見て駆け寄ってきた新入社員

の新川綾音（22）。

新川「夏丘さん、すみません。拡大コピーしよ
うとしたんですけど倍率設定する画面がどこ
かわからなくなっちゃって…」

映未「ちょっと待って、見に行くわ」

映未、荷物を置きコピー機に向かう。

新川「この前教えて貰ったのにすみません」

泣きべそ顔を作りながら後を追う新川。

映未、コピー機を操作しながら、

映未「見て。ここをこうだね」

新川「(操作画面を覗き込んで) あー、なるほど

お、そこですかぁ！えっと、ここをこうし

てえ、125%と」

操作ボタンを押し出てきた用紙を見て、

新川「おう！バッチリ出来てます〜！」

映未、冷めた表情で頷くだけ。

コピー機の近くで大声で話す営業部部长

の池本輝夫(55)と、横で話を聞いている

営業課長の村野優(63)

池本「いやぁ！ホールインワンよ！ホールイン

ワン！気持ちよかったねえ」

コピー中の新川、池本の話に反応して、

新川「えー！部長さん、ホールインワン取った

んですかぁ！」

村野「でもそれ、夢の話なんですよね」

新川「やだ、夢の話なんですかぁ(大笑)」

池本「夢でも気持ちいいもんは気持ちいいんだよ！それにこんなにはっきり覚えてるって事は正夢の可能性あるからね」

雄弁そうに語る池本。

村野「正夢になるといいですね（棒読み）」

新川「ほんとですねえ〜！」

映未、会話に寄らず自分のデスクに戻り営業部の山本栄治（25）に楽しそうに声を掛ける須藤を目で追う。

須藤「やまもっちゃん、おっはよう」

映未「正夢…か…（つぶやく）」

須藤、コピー機の横に行き新川に話しかける。

須藤「新川さん、大丈夫？コピーうまくいってる〜？」

映未「コピーはコピー機がしてるし」

デスクでぼそっと突っ込む映未。

新川「はい！（嬉しそうに）大丈夫です！お気遣いありがとうございます」

須藤「そかそか、何か困ったことがあったら遠

慮せずにも何でも言っただけ」

新川「ご親切にありがとうございます！ 須藤さん優しいんですね！」

須藤「いやあ、そんな事ないよ、普通だよ、普通！ 新人さんを助けるのが俺達の役目なんだからさ」

池本「お！ そうだぞ、新川くん。今は先輩達を頼って、わからない事があれば誰かに聞いて今日も一日よろしく頼むよ」

池本、嬉しそうに新川の肩をたたく。

新川「はいっ！ がんばります♪」

須藤、池本、新川、和気あいあい。

映未「(ボソッと) なによ、皆して嬉しそうに。鼻の下の伸ばし合いだよ」

パソコン作業を始める映未。

新川、コピーを終え映未の隣の自席に戻って来る。

新川「須藤さんて面倒見いいんですね」

映未「あんなの調子いいだけでしょ」

新川「そうですか？ でも見た目も爽やかイケメ

ンだからモテるんじゃないですか？」

映未「さあ？外見でモテても、あの調子で話してたら幻滅されちゃうんじゃない？」

新川「私は普通に良い人だと思います」

無邪気そうに笑う新川。

映未「新川さんて、ああいうのがタイプ？」

新川、目をパチッと開き、少し考えて、

新川「タイプ：というのはちょっと違いますが
…、一般的にモテるタイプなんじゃないですか？ていうか、夏丘さんは須藤さんと付き合っているじゃないんですか？」

映未「えっ？」

映未、一瞬手が止まり動揺している。

映未「なんで？…別につきあってないよ」

新川「ふーん。だって、夏丘さんて須藤さんと仲良いじゃないですか？」

映未「同期っていうだけだよ」

新川「へえー…。ちなみにい…、夏丘さんは付き合ってる人いるんですか？」

映未「え？何？」

新川「え？聞いちゃダメでした？」

映未「別に：今は特にいないけど」

新川「そうですか。私もです（ニッコリ）」

映未「・・・」

課長席から須藤を呼ぶ村野。

村野「須藤くん。ちょっといいかな」

須藤「はいっ」

村野「新入社員歓迎バーベキュー大会の件なんだけど：、例年通り若手中心で準備とか任せたいんで、須藤くん取りまとめ頼めるかな」

須藤「了解っす！」

村野「じゃあ、よろしくね」

それを聞いていた映未と新川。

新川「そう言えばバーベキュー大会の案内まわってきてましたね」

映未「（作業しながら）ああ、行ける？」

新川「はい！私アウトドア好きなんで！夏丘さんは行かれますか？」

映未「うん、まあどうせ準備要員に駆り出されるだろうから」

新川「準備って、みんなで食材の買い出しとか行くんですか？」

映未「そうだね。買い出し班と設営班に分かれてやるかな」

新川「なんか楽しそうですね！私も準備に参加したいです！」

映未「え？なんで？新川さんは今年は歓迎される側なんだから、別に準備には関わらなくていいんだよ」

新川「…ダメですか？」

映未「ダメな事はないけど、どうせ来年からは半強制的にやらされるんだし、今年わざわざやらなくたって良くない？」

新川「じゃあ、来年の為の練習という事で！」

早速須藤さんにも伝えてきますね！」

嬉しそうに須藤の所に行く新川。

気になって怪訝な表情の映未。

村野「夏丘くん」

いつの間にか側に立っていた村野に少し驚き体を起こす映未。

映未「はい」

村野「(申し訳なく)夏丘くんも休日に悪いけど
バーベキュー大会の準備の件、お願いね。須
藤くんのサポートよろしく」

映未「あ、はい…」

村野「部長、バーベキュー大会、大好きなんだ
よなあ…(少し面倒くさそうに)」

ボソツと言い、自席に戻っていく村野。

楽しそうに話す新川と須藤をチラ見しながら強めにキーボードを叩く映未。

木場M「映未、最近何かイライラしてる？」

○居酒屋 同日(夜)

同じ会社のデザイン部で働く木場優香

(26)と仕事帰りに呑んでいる映未。

映未、日本酒のコップを口元で止めて、

映未「なんで？」

木場「いや、なんか、なんていうか(手で表現しながら)滲み出てる。イライラが」

映未「そうかな？」

映未、コップを荒っぽくゴンと置く。

木場「それ！それそれ！なんか今ストレスの塊
感じた」

映未「別に、いつも通りだよ」

木場「いや、明らかに違うでしょ。いつものク
ールさが見当たらない」

映未「別に：クールじゃないし」

木場「いつもは高い所から冷ややかに外界を眺
めてる仙人みたいな温度感じゃん？」

映未「なによそれ？私はただ波風立たない平穏
無事な毎日を静かに過ごしたいと思ってるだ
けだよ」

木場「必要以上の人とは関わらず？」

映未「関わる必要のない人と必要以上に関わる必
要ある？」

木場「：恋愛もせず？」

映未「：それは、そういう時期が来て自然とそ
ういう流れになれば：」

木場「いやいやいや、映未ちゃん、そんな自然
とくなんて言ったら欲しいもののどんどん他

の誰かに持ってかれちゃうよ？」

映未「だいたい、そんな事で焦りたくないし、自分のペース乱されたくないし」

木場「…ねえ、その新人ちゃん、須藤の事狙ってるんじゃない？」

映未「え…？」

木場「それでイライラしてるって見た！」

映未「なんでそんな事で私が」

イライラを呑み込むようにコップの日本

酒を呷る映未。

映未「まあ、彼女は誰にでも愛想いいから。須藤に限らず部長でも課長でも愛想振りまいてるよ」

木場「あー、みんなに愛されたいタイプ？」

映未「…なんか、いつも調子が良いっていうか男ウケ狙ってますっていうのが見え見えで、苦手なんだよね」

木場「それは用心しとかないと、須藤も持ってかれちゃうよ（ニヤニヤ）」

映未「だから別にそれは関係ないって言うてる

でしょ！どうせあいつは何も考えてないんだから」

木場「映未ちゃん、そんな事言ってるいいのかい？入社した時からなんだかんだ言ってるって気にはなってたんでしょ？そろそろ思い切って告ってみたら？」

映未「いや、あたしは別に、そういうのは求めてないから」

木場「映未さ、もうちょっと素直になってもいいよ。仕事出来る人っていうのは皆認めてるんだから、そんな肩肘張って硬派気取ってなくったってさ。なんなら新人ちゃんのユルさちよっと分けて貰ったら？」

映未「・・・（目で反抗）」

木場「まあ、無理か。ある意味その不器用さが可愛げでもあったりするんだけどね。私からしたら」

映未、返答に困り、ほぼ空のコップの日
本酒を吸い込む。

○映未のアパート 同日（夜）

映未、帰ってきてきてドアの鍵をかけ、ベッドに座ってスマホを見る。

「BBQ準備メンバー」のグループラインに須藤が書き込んだ「明朝、役割分担決めるのでよろしく！」の文字。

× × × （フラッシュ）

新川「私も準備に参加したいです！」

新川と須藤が楽しそうに話している。

× × ×

メンバーに新川も入っているグループ一覧を見ながら表情を曇らせる映未。

そこにピンポンとインターホンの音。

映未「誰だろこんな時間に」

映未、インターホンのモニターを見る。

黒ずくめの刺々しいパンク系スタイルで鼻ピアスに赤黒い口紅をした若い女（天使・見た目20歳）が映っている。

映未「え？」

映未、恐る恐るインターホンの通話ボタン

を押し、

映未「…どなたですか？」

天使（モニター）「あー、初めまして。ちょっと中に入れて貰ってもいいですか？」

映未「え？いきなり何ですか？」

天使（モニター）「お邪魔します」

ガチャツと玄関のドアが開く音がして慌てて玄関へ向かう映未。

映未「えっ！ちょっと待って！？鍵閉めてたのになんで！？」

靴のまま部屋に入ってくる天使。

映未「ちょっと！あなた何なんですか！勝手に入ってこないで！てか靴！」

天使「大丈夫です。靴、汚れてないんで」

映未「いや、そういう問題じゃなくて」

天使「心配しないで下さい。私、悪人ではないので」

映未「いや、不法侵入なんだからどう考えても悪人でしょ！警察呼びますよ！」

天使、映未の方に向き直って、

天使「改めまして自己紹介しますね。私、簡単に言うと、天使です」

映未「・・・！？天使い！？どう見てもこの格好は天使というよりか悪魔でしょ」

天使「あー、見た目で決めつけるのやめた方がいいですよ。多様性の時代なんで」

映未「いや、今はそういう次元の話じゃなくて・・・、てかこれはちゃんと犯罪だから」

天使「・・・。取り敢えず羽が白いので天使って事で納得頂けますか？」

天使、背中に白い羽を出現させ、少し動かして見せる。

映未「・・・！何この大掛かりな衣装」

天使「羽は衣装じゃないです。ちなみに悪魔の場合は羽は黒くて尻尾が付いてるんで」

まじまじと羽を見る映未。

映未「いやいやいや、そういう事言ってるんじゃないくて、一体何が目的なんですか？」

天使「あなたの望みを7つ叶えます。ちょっとした見返りは払ってもらいますが」

映未「はぁ？何？宗教の勧誘？」

天使、手の上に光とともにタブレットを
出現させる。

天使「見返りは望みのレベルに合わせてメニュー
ーから選べます。望みを叶える為にはちよ
っとした不幸を負ってもらい、それでも欲
しい望みなのか考えて決めて貰います」

映未「何今の？どうやってこれ出したの？」

天使「私の言ってる事信じてもらえました？」

映未「…でも、なんで、突然私のここに現れた
の？なんで私なの？」

天使「それは…、選ばれたからです」

映未「選ばれた？」

天使「何か望みはありますか？」

映未「望み…？（つい思わず考えてしまう）」

× × ×（フラッシュ）

須藤「おう、夏丘！（満面の笑顔）」

× × ×

ハッと、我に返る。

映未「そんな急に言われたって…、ていうか、

だいたいそんな事信じられないし」

天使「では、辞退しますか？」

映未「えっ！？あ、いや、それはちょっと待って。じゃあ、とりあえずそれが本当かどうか確認の為に一回やってみせてよ」

天使「何を望みますか？」

映未「えっと、じゃあ…。あ、あれ！あの、絶対に午前中で売り切れてるからいつも買えない

『グランマ（パン屋）』のクロワッサン！あれ、

食べたい！」

天使「・・・（そんな事？）」

映未「…ダメなの？」

天使「いや別に良いですよ。…では、見返りをメニューから選んで下さい」

見せられたタブレットを恐る恐る覗き込む映未。

画面には見返りメニューとあり、『口内炎・吹き出物・ねんざ・寝違え・頭痛・腰痛・突き指・罵声・青あざ・落とし物…（など）軽度』とある。

天使「どれか選んでタッチして下さい」

映未「え？なんなのこれ。どれも嫌だな」

天使「このレベルなら軽度なので大したことはないと思います」

映未「そうは言っても痛いのはヤダし…。じゃ

あ…とりあえずこれで…」

映未、不安そうに画面にタッチする。

タブレットがピコンと鳴る。

天使「はい、受け付けました。あ、それと、見返りの内容は受け付け後に記憶から消されますので何が起こるかその時までわからない仕様になってます」

映未「え？何それ？先に言ってよ！えっ！？」

ほんとだ、何選んだか思い出せない」

天使「まあ、このレベルなら大した事ないですよ。日常の出来事レベルです。では、おやすみなさい」

キラキラと光りながら消えていく天使。

映未「え！え！ちょっと待って！それっていつ起きるの！？」

映未、天使の姿が見えなくなりキョロキョロと周りを見回す。

映未「え？消えちゃった？」

○恵比寿商事本社営業部 日替わり（朝）

新川「夏丘さん、これどうぞ！」

新川、『グランマ』のクロワッサンを映未の座っているデスクに置く。

映未「…！どうしたのこれ？」

新川「今日、父がこっち方面に車で出勤って言うんで一緒に乗せてきて貰ったんですけど、『グランマ』の前通った時に、夏丘さんが前に『グランマ』のクロワッサンがどうしても食べたいけどどうせ一生買えない〜！』って言うってたの思い出して、朝ならまだあるかもと思って寄ってみたらあったんで買ってきたんです」

映未「私そんな事言ったんだ…」

新川「あれ？『グランマ』のクロワッサンじゃなかったでしたっけ？」

映未「いや…、『グランマ』のクロワッサン…です」

新川「良かったあ！お昼に食べましょ」

映未「…ありがと…」

新川「あれ？夏丘さん、ほったどうしたんですか？」

映未「え？」

映未の頬に大きめの吹き出物がひとつ。

須藤「すいませーん！昨日グループライン送ったバーベキュー準備メンバーの方、ちょっと集まってもらえますか！」

分担表を書いたホワイトボードの前に立ち、大きな声で招集をかける須藤。

○同 ホワイトボードの前 同時刻

須藤、映未、新川の他に、若手社員、山本栄治、水野和孝(25)、津田正之(24)、中尾美和(24)の4名が集まってくる。

ホワイトボードには、

買い出し班A(食料)、B(食料以外)、

設営班 と書いてある。

須藤「えっとー、とりあえずこの中で買い出し班A・Bと、設営班に分かれてもらうんですけど、7人なんで2、2、3に分かれる感じでいいっすか」

皆、うなづく。映未、なんとなく不安げに腕を組んで見ている。

須藤「…んで、設営班は当日、テントやバーベキューコンロとかを会社の倉庫まで車で取りに来てもらいたんで、大型の荷物乗せられる車出せる人お願いします。ちなみに俺は荷物載せられる車持っていないんで誰かお願いしますます！」

水野「そんな事言って、須藤さん、自分が飲みたいから車出さないって魂胆なんじゃないっすかあ？」

須藤「おま、何言っただよ！ちげーよ！」

じゃれ合う二人。

新川「ハイ！（手を上げる）うちにファミリーカーあるんで出せます！」

須藤「えー？新川さん運転出来るの？」

新川「出来ますよお！私アウトドア好きなんで
学生の頃はよく荷物積んでキャンプとか行っ
てたんですよ！」

須藤「そうなんだあ！いいじゃん！あ、でも
せっかくの新人歓迎会なのに飲めなくなっち
やうよ？」

新川「私アルコール飲めないんで」

須藤「そうなの？じゃ、お願いして良い？」

新川「はい！」

須藤「よし！あーでも、設営班は重いもの運ぶ
んで男手があった方がいいな。俺が倉庫の鍵
預かる事になるからとりあえず俺と、もう一
人男で誰か頼めるかな？」

山本「じゃあ、俺、設営班行きます」

須藤「お！やまもっちゃん、設営班で！」

須藤ホワイトボードに名前を書く。

『新川・須藤・山本』と並んだ名前を見
て落ち着かない様子の映未。

須藤「それじゃあ、後は買い出し班だけど食料

チームとそれ以外チーム、どう分ける？男男・女女チームでもいいし、男女混合チームでもいいし」

楽しそうに他の4人の顔を見る須藤。

楽しそうに映未を見る新川。

なんか楽しくない映未。

○道 同日（夕方）

徒歩で帰宅途中、浮かない顔の映未。

映未のスマホが鳴る。映未の母、夏丘幸枝

（52）から着信。

映未「もしもし」

幸枝（電話）「もしもし。映未？今いい？」

映未「うん。今家帰るところ。どうしたの？」

幸枝（電話）「あのね、おばあちゃんの事なんだけど、急に体調悪くなって今日入院になっちゃったのよ。だから映未もまたお見舞い行っ
てあげて。おばあちゃん、顔見たら元気出る
と思うから」

映未「うん…。でも行っちゃってどうせおばあ

ちゃん私の事もうわかんないし…」

幸枝（電話）「映未に久しぶりに会ったら刺激になって何か思い出す事もあるかもしれないじゃない。たった一人だけの孫なんだし映未もよく面倒見て貰ったんだから、ね」

映未「うん…、まあ、また時間出来たらね」

幸枝（電話）「そんな事言わないで出来るだけ早く行っただけよ。おばあちゃんの状態ももうあんまり良いとは言えないから」

映未「ん…わかった」

ため息をつき通話を切る。

○実家 15年前（日中）（映未の回想）

部屋で映未の祖母きぬゑ（70）が泣いている映未（二）の手を握り優しく声を掛けている。きぬゑの指に絆創膏。

きぬゑ「おばあちゃんはいつもえいみちゃんを応援しているからね」

○実家 15年前 日替わり（日中）

蓋が開いた空っぽの鳥かごと開いた窓。

小さな白い羽根が舞っている。

泣いている映未（二）

映未「おばあちゃん！どうしよう！ピーちゃん

んが！ピーちゃんが逃げちゃった！」

きぬゑ（70）「泣かないで、落ち着いて。おばあ

ちゃんが見つけてあげるからね」

愛しそうに映未の頭を撫でるきぬゑ。

きぬゑの手の甲には（火傷に）ガーゼが

張ってある。

○老人ホーム 2年前（日中）

車椅子でひなたぼっこをしているきぬゑ

（88）ぼんやりしている。

映未（24）そっと横にしゃがみ、恐る恐る

きぬゑに話しかける。

映未「おばあちゃん…」

きぬゑ、ゆっくり振り向くが無反応。

（回想終わり）

○映未のアパート 同日（夜）

玄関を開けて力なく入ってくる映未。

部屋の電気を付ける。

天使「おかえりなさい」

ベッドに座っている天使（羽は無い）

映未「（驚いて）居るんだ。また靴履いてるし」

天使「今日の答え合わせです」

映未「答え合わせ？」

天使「見返りは、吹き出物でした。クロワッサン美味しかったですか？」

映未、頬を触りながら、

映未「ん、ああ…、美味しかった…」

天使「それは良かったです」

映未「でも、クロワッサンと吹き出物くらいじ

ゃ天使のお陰とはまだ信じれないし」

天使「あとろつ望めますから何なりとどうぞ。

あ、でも死んだ人を生き返らせてとか、死にそうな人を健康にしてとか、誰か死なせてとかいう感じのは無理です。人の命に関わることは天使の範疇ではないので」

映未「じゃあさ…、宝くじ高額当選とかは？」

天使「いいですよ」

映未「え…、（まさか！）いいんだ！？」

天使「はい、見返りメニューがこれです」

映未、タブレットを見て、

映未「やめとく」

映未のライン着信音。

B B Q 準備グループラインに、「新川ちゃん、火吹き棒持ってる？」と須藤の書き込み。映未の表情が曇る。

映未「新川ちゃんって、いつの間にかちゃん付けになってるし…。ていうか男女混合チームとか嬉しそうに言ってんじゃないわよ。なんだそれ。去年私も設営班で即戦力だったんだから、それ思い出して私も設営班にしときゃあいいじゃんよ！」

天使「・・・」

映未「それに何あれ、須藤と一緒に設営班に決まった時のあの新川の顔！」

× × ×（フラッシュ）

楽しそうに映未を見る新川。

× × ×

映未「何をアピりたいんだっ！『私、お先に一歩リードしました』的な？はあ？！あたしの方がずーっと須藤に近いわ！」

天使「……」

冷やかな天使の視線に気づき、

映未「…違う。違うの、私はそういうキャラじゃないから」

自分を落ち着かせようとする映未。

天使「……」

映未「はぁぁ！やだ。なんでこんなイライラするんだろ？私は一体何に腹が立ってるの？」

狼狽え頭を抱える映未。

天使「トラブってますか？」

映未「頭と心がバグってる」

天使「望みでそれを解決してはどうですか？」

映未「望むって何を！？それがわからないから困ってるの！」

天使「そうですか。でも、ただ頭抱えてるだ

けじゃ何も変わらないですよ」

映未「じゃあどうすればいいか教えてよ！」

天使「それは2つ目の望みですか？」

映未「え？それも見返り求められるの？」

天使「はい、一応」

映未「わかった…（不服だけど）2つ目の望み
でいい」

天使「では、見返りメニューをどうぞ」

タブレットを手に取り考える映未。

少し考えてタッチする。

ピコンと音が鳴る。

天使「はい、受け付けました。ではお伝えしま
す」

映未「うん」

天使「まず自分の心に正直になって、今一番し
たい事を望みましょう」

映未「え？…それだけ？」

天使「はい」

映未「そんな事言われなくなっちゃって…」

天使「言われずに出来ましたか？」

映未「……………」

天使「あなたは自分の心に素直に従うのが怖い
んですか？」

映未「そんな事…」

天使「どうしますか？3つめに本当の願いを望
みますか？」

映未「本当の？」

スマホを見つめ考え込む映未。

× × × (フラッシュ)

須藤「おう、夏丘！（満面の笑顔）」

須藤「起きてるか？」

映未のほったたをつつく須藤。

× × ×

映未「私…（絞り出そうとする）」

× × × (フラッシュ)

映未、はみ出した須藤のネクタイを押し
込む。須藤と顔が近い。

× × ×

映未「（決心したように）私…！…す、須藤とっ
…！（徐々にトーンが下がり）と…、とりあ

えず…、私も設営班に…して…」

天使「……」

映未「……」

天使「…わかりました」

○恵比寿商事本社営業部 日替わり（朝）

自分のデスクに座っている映未。

首が痛くてまわらない。

× × × （回想）

天使「あ、ちなみに2つ目の望みの見返りは、内容的に明日の朝以降に発動されます」

× × ×

映未「答え合わせしなくても、多分この寝違えだな」

新川「おはようございます！首どうしたんですか？」

映未「ただの寝違え」

新川「あらー、大丈夫ですか？」

映未「ただの代償だから大丈夫」

新川「ん？」

そこに真剣な表情で須藤がやってくる。

須藤「夏丘、お前って結構、力あるよな？」

映未「…何それ？」

須藤「去年バーベキューの時、設営班でバリバリ、テント立ててたよな」

映未「え？（「設営班」にハッとして）」

須藤「やっぱ、夏丘も設営班入ってくんないかな？」

映未「な、なんで？」

須藤「いやさ、やまもっちゃんがさあ、バーベキューの日、朝一で仕事入っちゃったらしくてさ。遅れて合流出来るんだけど、設営班はやっぱ朝一から3人は人手が欲しいわけよ。でも他の男連中は買い出しに車出す事になっててこっち呼べないから、夏丘に設営班に来て貰おうかと思ってさ」

映未「ああ…、別にいいけど…」

須藤「おお！助かるわ！夏丘の腕力、頼りにしてまっす！ほんじゃあ、よろしく！」

須藤、元気よく去っていく。

新川「良かったあ、一緒に設営班ですね！」

映未「お邪魔するけどごめんね」

新川「何言ってるんですか。夏丘さんも一緒に
ら心強いし楽しみですよ！」

映未「・・・」

映未、しらじらしい思いながら動か
せない首を庇いつつ立ち上がる。

移動しようとした瞬間、足元の荷物に
つかず躓き、咄嗟に支えようと出した手
がデスクのペン入れを倒し大きな音と共
に派手に転ぶ。

新川「だ、大丈夫ですか！？」

慌てて新川が立ち上がる。

近くの社員も何事かと覗き見る。

座り込んで、思いつき床にぶつけた膝
をさする映未。

映未「ったあ。3つ目の見返りはこれかあ？」

（ボソッと）

新川「膝打ったんですか？」

真剣に心配して映未を支えようとしやが

み、落ちたペン類を拾う新川。

映未「大丈夫大丈夫、ちょっと油断した」

そこに外回りに出るためカバンを持った

須藤が駆け寄ってくる。

須藤「何！？新川ちゃん大丈夫！？」

映未「あたしだわ！あっつ、いててて」

首も痛い映未。

須藤「えー？夏丘？どうしたんだよ？めずらし

いじゃん！お前がドジ踏むなんか」

映未「うるさいっ」

映未、立ち上がろうとする。

須藤、すっと映未の脇に腕を入れ軽々と

抱え上げ、立ち上がらせる。

勢いが付き過ぎてバランスを崩し須藤の

胸元に倒れ込む映未。

須藤、「おっ」と体を受け止める。

ドキッとする映未（時の流れがスローモ

ーションのように）

それを見ていた新川の表情が強張り、咄
嗟に映未の腕を掴み自分の方にグイッと

引き寄せる。

新川「夏丘さん大丈夫ですか？立ってます？」

映未「あ、うん…」

須藤「気をつけろよく！明日は設営班担当の大
事な体なんだからな！では外回りいつてきま

あーす！」

元氣よく外回りに出ていく須藤。

映未「……………(ドキドキ)」

新川、ぎゅっと夏丘の腕を掴んでいた手
をそっと離す。

新川「……………(気まずそう)」

○居酒屋 同日（夜）

映未と木場が呑んでいる。

泥酔気味の映未、寝違えの治まった首を
捻りながら、

映未「いやあ、あれ、なんだろね。私を須藤
から無理やり引き剥がした時のあの鬼の形相
！」

木場「それ、あれだね。ジェラシーだね」

映未「明日バーベキュー大会なんだけどさ」

木場「ああ、営業部の新入社員歓迎会？」

映未「どうせあたしは腕力しか求められてないんだよ。あいつにとっては男友達とおんなじなんだよ！日本酒おかわり！」

木場「あ！私も同じのおかわりください！」

木場、店員に注文して、

木場「ていうか、それじゃあ映未、明日も朝早
いんじゃないの？こんな呑んで大丈夫？」

映未「明日はうかうか呑んでられないから今日
呑んどくの！」

木場「なんで？あ、そうなの？（よくわからな
いけど）じゃあ、まあ、あたしは休みだし、
呑むかあ！」

映未、酔っ払ってグダグダ。

○あかりの家 外 15年前（日中）

（映未の夢）

あかりの家のリビングが見える窓に向か
って立っている映未（二）の後ろ姿。

あかり「えいみちゃん？」

あかり（二）の声に驚き振り返る映未。
うさぎのぬいぐるみを抱いたあかり。

映未「あかりちゃん！」
（夢終わり）

○映未のアパート 同日 （夜）

酔っ払って服のままベッドにうつ伏せに
なり寝てしまっている映未。

天使「答え合わせしますか？」

突然の声に驚いて目を開ける映未。

天使、ベッドに座っている。

映未「・・・！びっくりしたあ。いつの間に入っ
て来てたの？」

映未、ベッドに寝たまま眠そう。

天使「いつでもどこからでも現れます」

映未「じゃあ前はなんでわざわざインターホン
押して玄関から来たの？」

天使「さすがに初日は突然部屋に現れるとい
うのは刺激が強すぎるかと思ったので」

映未「玄関からでも十分刺激的だったけどね」

天使「答え合わせは…」

映未「あー、寝違えと青あざでしょ？」

天使「結果は満足ですか？」

映未「それは…、明日になってみないとわかんない」

天使「そうですか」

映未「でも、設営班に入ったからってどうするの私？出来て、須藤と新川の関係が親密にならない様に見張るくらいの事だけだよ？ああそうだよ、それでいい。私はあの二人が必要以上に親しくなるのは嫌なんだから。新川が須藤に距離を詰めて行きそうになったら断固として阻止する。それだけだ…」

眠そうにおにゃおにゃと話す映未。

天使「…頑張ってください」

映未「それだけだ…」

映未、酔っているせいでそのまま眠ってしまう。

天使、しばらくどうしようか考えるがそっと毛布をかけてやる。

○恵比寿商事倉庫内　ＢＢＱ大会の日（朝）

倉庫内のテント等の荷物が積んである棚
の前で仁王立ちの須藤。

須藤と向かい合って立つアウトドア着姿
の映未と新川。

あ！

新川「はいっ！」

映未「・・・（身構えて）」

須藤「じゃあ、まずこいつを・・・」

須藤、荷物を出そうとして横の荷物が落
ちそうになる。

須藤「うおお、新川ちゃん、横のが落ちそ！」

新川「あぁっ、取りますね！」

新川が須藤の横に駆け寄ろうとした所を
映未がグイッと割って入り落ちそうな荷
物を押さえる。

須藤と映未、肩がくっつく程近い距離。

須藤「お！夏丘ナイスフォロー！」

映未「……（意識してしまい）」

新川「あ…、夏丘さん？」

映未「な、何？」

新川「首、治ったんですね！」

須藤「（荷物下ろしながら）なにになに？首どうしたの？」

映未「あ、え、うん…。まあ軽い寝違いだったから…」

新川「良かったですね（ニコリ）」

須藤「おー！治ってて良かったよ！じゃあ、これ運んで！新川ちゃんはこれいける？」

新川「はい！いきます！」

二人にどんどん荷物を渡していく須藤。

○倉庫前の駐車場 同時刻

須藤、映未、新川の車に最後の荷物を積み

終えて、車のバックドアを閉める。

須藤「これで終わりだあ！それじゃあ緑地公

園へ出発しようぜ！」

新川「後ろの席、荷物積んでるんでどちらか

良かったら助手席にどうぞっ」

と言いながら新川が運転席に乗り込む

と、既に助手席に座っている映未。

新川「早っ！」

映未、シートベルトを引っ張りながら、

映未「行きましょ」

新川「はい！」

後部座席に乗り込む須藤。

須藤「よろしくうー！」

駐車場を出て走り出す車。

○緑地公園 同日（日中）

バーベキュー日和。

荷物を運び終え設営を始める須藤。

首にタオルを巻きタープテント設営など

を率先してやっていく映未。

須藤「夏丘、めちゃくちゃ張り切ってるじゃん

くー！うん！いいよいいよー！」

映未「……（黙々と作業）」

新川「須藤さん、これどうやったらいいんです

か？このタイプのは使った事なくて」

タープテントの足を持っている新川。

須藤「どれどれ？」

映未、新川に近寄っていかうとする須藤
の前に素早く出て、

映未「これはこう」

手際よくテントの足を伸ばす映未。

新川「あー！こうやって固定出来るんですね！

こっちやってみます！」

新川、テントの足を伸ばそうとし伸縮部
分に指を挟む。

新川「痛っ！」

須藤「なに？どうしたの？新川ちゃん？」

映未が素早く新川に駆け寄り手を掴む。

映未「見せて」

その距離感に少し戸惑う新川。
指に血豆ができている。

映未、ポケットから絆創膏を出して、

映未「はいこれ、絆創膏貼ったときな」

新川「ありがとうございます！」

目を丸くして絆創膏を見つめる新川。

須藤「おっ、買い出し班到着したみたいだな」

駐車場で津田と中尾が荷物を下ろしているのが見える。

映未「運ぶの手伝ってくる！」

映未、駐車場の方へ数歩走り出すが、突然踵を返し戻ってきて、

映未「新川さん、一緒に来て」

新川「はいっ！」

小走りで駐車場へ向う二人。

それを笑顔で見つめる須藤。

× × × （少し時間経過）

人が集まりバーベキュー大会が始まっている。

よく晴れて暑いぐらいの日差し。

コンロで食材を焼く須藤たち若手社員。

既に疲れて独り木陰で休む映未。

映未「はぁ…。なんか疲れた」

新川は男性社員たちに囲まれ相変わらず愛想よく談笑している。

須藤、映未の所にやってきて、焼けた肉などの皿を渡す。

須藤「はいよっ」

映未「ありがとう」

映未、肉をかじる。

映未「うま」

須藤、隣で缶ビールを飲みながら、

須藤「新川ちゃんは相変わらず人気モンだな」

映未「・・・（モグモグ）」

須藤「いやあ、それにしても夏丘のお陰で、設営捗ったわあ。お前ってほんと期待を裏切らないヤツだよな！」

須藤、缶ビールを飲み干す。

須藤「なんだかんだ言って、オレ、夏丘には昔からいつも色々助けて貰ってるよな」

映未「なに、改まって」

須藤「え？オレの素直な気持ちだよ？」

映未「なによそれ、気味悪い」

須藤「それに新川ちゃんの面倒見もいいし！テントを立てる手際もいいし！天気もめっちゃ

くちやいいし!」

映未「天気は私、関係ないでしょ」

須藤「いやさ、オレ雨男なんだけど何故か毎年バーベキュー大会の日は良い天気だから、オレの雨男を上回る晴れ男か晴れ女がいんだろうな」

映未「部長じゃない?」

少し離れたところで社員数人を前に缶ビール片手に語っている池本。

須藤「そうかもな」

映未「多分てるてる坊主とかも作ってるね」

須藤「部長、バーベキュー大会いつも楽しみにしてるもんなあ」

映未「ポケットマネーで費用足してくれるくらいだもんね」

須藤「あゝ、ほんと、部長様々だわあ! ありがとうやゝありがたやゝ」

須藤、池本の方に向かって拝む。

それを見てそんな須藤こそいい奴だと思
い笑みを浮かべる映未。

映未「そうだね」

須藤「な？（映未に向かって満面の笑顔）」

青空をバックにした無邪気で爽やかな須藤の笑顔が眩しい。

映未、心底この笑顔を自分のものにした
いと思う。

映未「…あのさ…（言いかけて）」

須藤「（聞こえず）おかわり貰ってくるわ」

空き缶を振りながら駆けていく須藤。

映未「あ、うん」

映未、須藤の後ろ姿を見つめながら、

映未「あつつう（暑い）…」

5月の強い日差しに目を細め火照った頬
の汗を拭う映未。

そこに缶ビール二本を手にした池本がや
って来て一本を映未に渡し、

池本「夏丘くん、食ってるかい」

映未「あ、どうも、頂いてます。あの、いつもバ
ーベキューの費用、個人的に足して下さりあ
りがとうございます」

池本「いや、そんな事はいいんだよ。僕はね、
こうやって日々一緒に働いている仲間が仕事
以外の場で集まって和気あいあいとコミュニ
ケーションを取れる、こういう時間を大切に
したいんだよ」

映未「はい：（頷く）」

コンロ付近で若手社員と話していた須藤
の大きな声が聞こえる。

須藤「ちょっとションベンいってくるわ！」

池本、気にせず話し続ける。

池本「世間ではさ、最近は若いもんが仕事以外
の付き合いを嫌がって呑みニケーションでも
のが無いっていうじゃない」

映未「はい：」

映未、トイレのある施設の方へ歩いてい
く須藤を横目で追いながら返事する。

池本「ところがその辺うちは、休みの日だって
いうのに若いモンもこうやって朝から集まっ
てくれて、いやね、ほんと僕はね、心底感動し
てるんだよ」

涙ぐむ勢いの池本の演説。

池本「うちの部署の連中は皆、人間が良い！人間が良いっていうのは生きていく中で一番大切な事だからね。もちろん仕事に於いても人間性というのは重要だし、人と人が繋がって成り立つものだからして…」

そこに新川が須藤の行ったのと同じ方向へ足早に歩いて行くのが目に入る。

思わずモグモグが止まる映未。

池本「夏丘くんも然り、夏丘くんが今面倒見ている新川くんも人間が良いね」

新川の行動が気になり腰を浮かせたりしながら、

映未「え、あ…、はい…」

池本「聞いたら、新川くんは新入社員でありながら今日の準備を手伝いたって自分から申し出てくれたそうじゃないか」

新川、須藤と同じトイレの方向に向かって
っている。

池本「これもいつも近くにいる夏丘くんの人間

力が影響しているんじゃないかと僕は思うわけだよ」

映未「あ、はぁ…（心ここに在らず）」

池本「僕はちゃんと見てるんだよ、夏丘さんの仕事ぶりにもいつも…」

映未「あ、あの、部長！」

池本「ん？」

映未「すみません、ちょっと…お手洗い…」

池本「おおっ！お手洗いか、行っトイレ！」

映未「すみません（苦笑）」

○トイレのある施設入口付近 同時刻

キョロキョロと周りの様子を伺いながら

施設の入口に向う映未。

少し離れたところからでもガラス張りの施設内の様子が見える。

トイレ前で後ろ向きで俯いて立っている新川の姿を見つける（何か思い詰めている様にも見える）

思わず側の木などに身を隠す映未。

そこにＴシャツで手を拭きながらトイレから出てくる須藤の姿が見える。

須藤、新川に気づき何かしら声をかけている。

突然須藤の胸元に寄りかかる新川。

それを受け止めるように抱きかかえる須藤。

映未「え…？（思わず目を逸らす）」

表情は強張り、呼吸が荒くなる映未。

再度、恐る恐る二人の方へ目をやると、須藤が新川に何か話し掛けている様子だが、新川は身動きせず須藤に身を預けたまま。

そんな新川を更にしっかり抱き締め直しいつもと違う真剣な表情の須藤。

映未、血の気が引いていく。

そこに山本がやってくる。

山本「あ、夏丘さん」

映未、驚いて振り向く。

山本「トイレ、この中っすよね？」

映未「あ…、うん」

山本「どうしたんすか？顔色悪いっすよ。気分でも悪くなったんすか？」

映未「あ…、いや、大丈夫…」

山本「いやそれにしてもまだ5月だっていうのにこの暑さはおかしくないっすか。熱中症のリスク大っすから気を付けた方がいいっすよ」

映未「…うん…」

山本「じゃ、トイレ行ってきます」

施設の方へ向う山本。

映未「あ…、ちょっ…」

映未、焦って先ほど須藤と新川の居た場所を見るが二人の姿はない。

山本、振り返り、

山本「あ、そうだ、さっき中尾さんが夏丘さんの事探してましたよ」

映未「そうなんだ…？わかった…」

力無く返事する映未。

山本、再び施設の方へ歩いて行く。

須藤と新川の姿はやはり見えない。

映未、少し考えるがゆっくりと歩いて皆の所へ戻る。

○緑地公園BBQ会場 同時刻

ぼんやりしながら皆の所へ戻っている

映未を見つけて駆け寄ってくる中尾。

中尾「夏丘さん、須藤さんって今どこですか

ね？」

映未「え…？（力無く）」

中尾「いや、夏丘さんでもいいんですけど」

映未「あ…、何？」

遠藤「テントとか片付ける時、私も手伝うんで会社まで一緒に乗せて行って貰えたり出来るのかなと思って。会社にちょっと忘れ物取りに行きたいんで…」

映未「あー…（思考が追いつかない）」

中尾「…車、乗れますかね…？」

映未「…うん…（遠い目）」

中尾「夏丘さん？」

映未「中尾さん…」

中尾「はい…」

映未「新川さんの車、3人しか乗れないから私の代わりに乗って帰ってくれない？」

中尾「あ、そうなんですか？じゃあ、私はやっぱりいいです。あの、忘れ物も別に…」

映未「いいの！（吐き出すように）」

中尾「え、いや、なんか悪いです」

映未「いや…、私の代わりに中尾さんが乗ってくれた方が、いい…」

中尾「…え？なんでですか？」

映未「あ、私…、急用思い出した。先帰るわ（棒

読み）」

フラフラしながら公園出口に向う映未。

心配してついてくる中尾。

中尾「え？今から帰るんですか？」

映未「あ、ごめん、片付け出来ないけど皆に言っ
っというて」

遠藤「はい…」

フラフラしながら歩いていく映未。

心配そうに後ろ姿を見送る中尾。

○道 同時刻

トボトボ歩く映未。

ぼんやりとしている表情がだんだん強張ってきて、涙がポロポロこぼれ出す。

○映未のアパート 同日（夜）

映未、部屋着でベッドに寝転んでいる。

電気を点けていない部屋は暗く点けっばなしのテレビだけがチカチカと映未の姿を照らしている。

遠くでゴロゴロと雷の音がしている。

映未「新川さんと何があったのか須藤に直接聞くべきか……？」

スマホのラインの画面を開き、しばらく画面を見つめるが、

映未「何て？どうやって聞く？」

スマホをベッドに放る。

外で雨がポツポツ降り出す。

寝転んだまま悶々とするが、再度スマホ

を掴み須藤にメッセージを送る。

「今日のごめん。今、家？」

すぐに須藤から「大丈夫だよ！うん。今から風呂入るところ。どうした？」と返信。

映未「家か…」

続けて「ひとり？」と送る。

映未「何聞いてんだ私」

あわてて送信取消しようとするが既読になっていてすぐ「ひとりぽっちだぜ

(泣)」と返信が来る。

続けて須藤「どうしたんだよ？」

映未「んあーー」

どうしていいかわからず「私もひとりぽっちだよ！」と送る。

天使「二人ですけどね」

映未「・・・！」

映未、慌てて起き上がる。

暗闇に天使がお決まりの様子でベッドに座っている。

映未「もう！びっくりさせないでよ」

天使「すみません、つい」

スマホが鳴りB B Qグループラインに
新川の書き込み。

「皆様お疲れ様でした！本当に楽しい
一日で良い経験をさせて頂きました！
ありがとうございます！」

すぐに須藤が「新川ちゃん、色々あり
がとね！車も出してくれて助かりまし
た♪」と返信。

またすぐ新川「須藤さんの人間力に皆
引きつけられるんだなと思いました」

「また私にお手伝いできることがあれ
ば何でも言って下さい！」「どこまで
もついていきます笑」と続けて返信。

須藤もすぐに「おっく！ありがと！こ
れからもよろしく！笑」と返信。

暗い中スマホを見つめながら、

映未「もう、やだ…ついてこないでよ」

映未、顔を歪めてスマホを置く。

雨の音が激しくなる。

映未「4つ目の望み…頼みたいんだけど」

天使「はい、なんですか？」

ゴロゴロと雷の音が大きくなる。

映未「新川綾音を…、私の前から…消して」

稲光が走り映未の横顔を照らし遠くで

雷の落ちる音。

さながらホラー映画のワンシーン。

天使「……わかりました」

タブレットを差し出す天使。

映未、ゆっくりタブレットを覗き込み、

映未「…なんかレベル上がった？」

天使「まあ、望みの内容に沿って」

映未「なるほど…。わかった…」

ザーザーと降り出した雨の音が響く。

映未、厳しい顔つきでタブレットをタッ

チする。

ピコンと受付の音が鳴ると同時に稲光で

窓が一瞬明るくなり映未の姿を浮かび上

がらせる。

天使「今の映未さんこそ悪魔みたいですよ」

そう言われ天使を見る映未の横顔を、
テレビの明かりがチカチカ照らす。

○恵比寿商事本社屋上（日中） （映未の夢）

新川、思いつめた表情でグングン柵まで
歩いていく。

無表情で柵を乗り越え、空を見上げて両
手を広げ、鳥の様に飛び立つ…。

（夢終わり）

○映未のアパート（朝）

ベッドで慌てて飛び起きる映未。

映未「…夢か…」

○恵比寿商事本社営業部 日替わり（朝）

疲れた様子で出勤してくる映未。

隣の席に新川の姿はない。

まわりを見渡すが、どこにも新川の姿は
見当たらない。

落ち着かない様子で仕事を始める映未。

ちょうど通りかかった中尾を呼び止め、

映未「あ、中尾さん。新川さん見た？」

中尾「あー、今朝はまだ見てないですね」

映未「そっか…」

いろいろと想像を巡らせる映未。

そこに部長室から顔を出し神妙な面持ち

で映未に声を掛ける池本。

池本「夏丘くん、ちょっと」

映未「はい…（唾をぐくり）」

○同 部長室 同時刻

恐る恐る部長室へ入る映未。

映未「失礼します」

神妙な面持ちの新川が立っている。

映未、驚くが平然そうにふるまう。

池本「新川くんには今説明して了解もらったんだけどね」

映未「はい…」

池本「大変急な事なんだけど、新川くんには今週木曜日付けで大宮の営業所の方へ異動して

もらう事になった」

映未「え？（これか！）」

池本「いやあ、夏丘くんには2ヶ月近く色々指導してもらって新川くんもここの部署に馴染んで来たところを本当に残念なんだけど…。上からの通達でうちから若手を一人回してくれって言われてね」

映未「…急ですね…」

池本「なんか、急にあっちに二人欠員が出てしまったらしいんだよ」

映未「二人も…」

池本「うちも人材が余ってるわけじゃないから新しく人を探すなり他に方法はないのか聞いてはみたんだけどね、それも急には難しいって言われてね」

新川「・・・」

映未「・・・」

池本「ま、そういう訳なんで申し訳ないが、木曜までに今新川くんのやってる仕事の引き継ぎを頼むよ」

新川「わかりました」

映未「…わかりました」

○同 部長室の外 同時刻

映未、新川、部長室を出てくる。

新川「あゝ、これがあのうわさの人事異動っていうやつですね（空元氣の笑）」

映未「・・・」

新川「やっと…」

急に激しい腹痛に襲われる映未。

映未「う…いたた…」

新川「どうしたんですか？大丈夫ですか？」

映未「大丈夫、ちょっとお手洗い行ってくる」

新川「はい…（心配顔）」

○同 トイレ入り口 （少し時間経過）

壁に寄り掛かりながら青ざめた顔でトイレから出てくる映未。

映未「ちくしょー。これかぁ。かなりきつ目の見返りだけど、これくらい受けて立とうじゃ

ないの」

壁に寄り掛かりながら歩く。

そこに須藤が慌てて駆け寄って来る。

須藤「夏丘あ！新川ちゃん異動なるんだって？

今部長が説明…（映未の様子に気付いて）っ

て、お前、大丈夫？」

映未「大丈夫。気にしないで」

須藤「う、うん…。いや、でもまだ2ヶ月程な

のに急に異動ってありえなくね？」

映未「そうだね」

須藤「せっかくみんなと打ち解けて仲良くなっ

てきたとこなのにさあ」

映未「かなり距離縮まったのにね（嫌味で）」

須藤「そうなんだよお！夏丘もそう思うだろ！

（何の違和感も無く）」

映未「仕事なんだし、上からの命令なんだから

仕方ないでしょ」

須藤「そりゃそうだけどさあ」

映未「うっ…」

お腹を押さえて再びトイレに駆け込む映

未。

須藤「なんか悪いもんでも食ったのか？」

心配しながら事務所に戻る須藤。

○同 営業部 同日（夕方）

新川、自席で資料を整理しながら映未に
仕事を引き継いでいる。

新川「私の方で受けていた仕事はこれで全部で
す。後、この分はすぐ出来るので明後日まで
にやっておきますね」

映未「うん…」

B B Qの日の二人が気なる映未。

× × ×（フラッシュ）

抱き合う新川と須藤。

× × ×

そこに外回りから帰ってきた須藤。

須藤「戻りましたあゝ！」

新川「あ！お疲れ様です！」

須藤「おうよっ！」

そのまま映未と新川の席へ来て、

須藤「あのさ、考えたんだけど、新川ちゃんの送別会しようぜ」

新川「えー！いいんですか！嬉しいです！」

須藤「短い間だったけど、せっかく仲良くなれたんだからさ！今週の水曜日、仕事終わりにどう？」

新川「私は大丈夫です！」

須藤「夏丘は？」

映未「…あ、うん、大丈夫だけど」

須藤「おっし！後は誰誘うかな？」

新川「あ…、3人でいいです！」

須藤「え？」

新川「一番仲よくして頂いたお二人に来て頂けたら私は充分です」

須藤「え？そうなの？」

新川「平日だし、バーベキュー大会もあったばかりだし、沢山来て頂いても何か私事で申し訳ないんで」

須藤「まあ、新川ちゃんの方が良いって言うならそれで…」

新川「その方がいいです！」

映未「・・・」

須藤「よし、わかった！じゃあとりあえず3人で飲もう！あ、新川ちゃんは飲めないんだっ
たよね？」

新川「私は、食べます！」

須藤「おっし！じゃあ飲んで食べよう！」

新川「はい！」

須藤「じゃあ、水曜日に！」

須藤、その場を去る。

新川「：やっぱりいい人ですね（涙目）」

映未「・・・」

新川、勢いよく映未の方に向き直り何か
言いたげに潤んだ目で見つめる。

映未「：何？」

映未、負けまいと見つめ返す。

新川、何も言い出せないまま思い直した
ように時計を見て、

新川「あ、こんな時間だ！私今日用事あるんで
お先失礼しますね！」

バタバタと事務所を出ていく新川。

そのまま椅子にもたれ掛かり、ふーっと深く息を吐く映未。

○公園 同日（夕方）

元氣なくトボトボ歩く新川。

仲良さそうに手を繋いで歩いている若いカップルを目で追いながら、

新川「はー！どうしょ」

気持ち押さえきれず目が潤む。

○居酒屋 同日（夜）

映未と木場がいつもの様に呑んでいる。

木場「新人ちゃん異動なっちゃったんだ？。」

ま、でも、これで映未のストレスも減るんじゃない？」

映未「うん…」

木場「なに？嬉しそうじゃないね？」

映未「私見ちゃったんだよね。バーベキューの

日、新川さんが須藤に抱きついてるとこ」

木場「ええっ？新人ちゃんそんな行動派だったんだ？」

映未「それで私もう…、なんでか、すごくパニックっちゃって」

木場「うん、それ、映未が須藤の事が好きだからすごく嫌だったんだろね（子供に話すように）恋愛に耐性ない映未には衝撃が強すぎたんだね」

映未「でもその後、二人共何にもなかったみたい」

木場「それって、新人ちゃんが行動に出たけど須藤が受け流した…って感じ？」

映未「わかんない。…わかんないけど、でも異動決まった後も新川さん、何か私に挑んで来そうな感じでさ…」

木場「まあ職場が離れても好きな人追っかける事はできるからねえ。それでまだ不安顔してるんだ？」

○恵比寿商事本社屋上 日替わり（日中）

新川、思いつめた表情でグングン柵まで歩いていく。

空を見上げ風に吹かれ涙が溢れてくる。

新川、スマホの画面を開き見つめる。

須藤「新川ちゃん」

新川、驚いて振り向き慌てて涙を拭う。

新川「あ、須藤さん！びっくりしたあ」

須藤「どうしたの？大丈夫？」

新川「え？私はぜんぜん大丈夫ですよ！ちょっと外の風に当たりたくなって。須藤さんこそどうしたんですか」

須藤「無理しないで、何か悩んでるんなら話してくれない？…あ、オレなんかで良かったら…だけど…」

新川「私ですか？無理してないですよ！」

須藤「新川ちゃん、我慢し過ぎてない？バーベキューの日だって倒れちゃうまで頑張ったりして…。倒れたの内緒にしといてって言うから皆には言わなかったけど…」

新川「あ、あの時はすみませんでした。でも別

に我慢したりしてないですよ…」

笑っているが目が潤んでいる。

須藤「……（心配）」

新川「…須藤さん。ほんとに須藤さんて優しいですよ。優しすぎます」

須藤「……（真剣に心配）」

新川「じゃあ…、告白…、しちゃってもいいですか？」

○同 廊下 同日（日中）

トイレから出てきた映未。

須藤と新川が並んで事務所に戻っていく
後ろ姿を見て表情が強張る。

○同 営業部 同時刻

デスクに座っている新川の隣の自席に戻る映未。

新川「夏丘さん」

映未「（新川の顔を見ず）なに？」

新川「明日、夏丘さんに伝えたいことがあります」

す…」

映未「……（新川を見る）」

新川「明日じゃなくて今言えよ、って思いますよね。でも、明日にします。明日の事を今言うのは今宣言しとかないと明日言えない気がして…」

映未「…そうなんだ（覚悟の目）」

○映未のアパート 同日（夜）

勢いよく部屋に入り叫びだす映未。

映未「ねえ！いるの？出てきて！5つ目の望みを言いたいのに！」

天使がキラキラと現れる。

天使「はい、何ですか」

映未「果し状を渡された。宣戦布告された。絶対須藤から手を引ける事だよ！」

天使「そうですか」

映未「もうなりふり構ってられない。私気付いた。私は須藤の事が好きで、だから他の誰にも取られたくないの！」

天使「それで何を望みますか」

映未「私、須藤を自分のものにしたい。須藤に私のこと好きって言って欲しい。いや、私が須藤に好きって言いたい」

天使「3つですか？回数オーバーします」

映未「いや、どうしよう。どうしたらいい？

私、自分が須藤の事が好きって事はわかったんだけど、どうしたらいいの？」

天使「その質問も望みですか？」

映未「いや、ダメ、自分で考える。えっと、どうしたいんだ私？」

天使「とりあえず自力で告白してみてはどうですか？」

映未「え？？自力って？」

天使「わざわざ残り3つの望みを使わず自分で相手に思いを伝えてみるという事です」

映未「そんな事、出来るなら悩まないよ！」

スマホの幸枝からの着信音が鳴る。

イライラしながら電話に出る映未。

映未「もしもし」

○病院 中 同時刻

通話可能エリアで電話している幸枝。

幸枝「もしもし、映未、今いい？」

（以下映未の部屋と適宜カットバックで）

映未「ちょっと立て込んでるけど何？」

幸枝「じゃあ、手短に話すけど…。おばあちゃんのことなんだけど、やっぱり体調が回復しな
くってね、今日先生にあと一週間持つかどう
かって言われたのよ…」

映未「え…」

幸枝「ずっと眠ったままなんだけど、映未も早
めに会いに来てあげて」

映未「うん…わかった。じゃあ、土曜日には行
く」

幸枝「…そう。まあ、様態が変わったらまた連
絡するけど…、気にしなくてね」

映未「わかった」

映未、通話を切る。

○映未のアパート 同時刻

天使「すぐ行かなくていいんですか？」

映未「え？」

天使「おばあちゃんのところへ」

映未「あ…、聞こえてた？今日はもう遅いし、

明日も仕事だし、土曜日には行くよ」

天使「そうですか…」

映未「でもおばあちゃん、随分前から認知症で

さ、私の事ももうわかんないんだよね」

天使「……」

映未「やさしいおばあちゃんだったけど…。

あ、それより明日の事考えないと。とにかく結

論から言うと私は須藤と付き合いたいと思っ

てる。でも私が告ったところで付き合えるか

わからない。だから須藤から告ってくれるよ

うに仕向けてくれない？」

天使「…わかりました。では見返りを」

天使が差し出すタブレットを覗き込み

画面にタッチする映未。

ピコンと音が鳴る。

天使「5つ目の望み、受け付けました」

映未、落ち着かず部屋をウロウロする。

映未「ダメだ、冷静になれない。私冷静じゃないよね？」

天使「そうですね」

映未「なんかもうぐっちゃぐちゃ。私じゃない私が暴走して止められない」

天使「心配しなくても暴走しているのも映未さんの本心ですよ」

映未「え？（髪も乱れて疲労した様子）」

天使「なんか、今日は人間ぽい：ですね」

○恵比寿商事本社営業部 日替わり（朝）

緊張の面持ちで出勤してくる映未。

今日の日程のボードを見ると、須藤は朝から午後まで外回りである。

とりあえずホッとして席につく映未。

新川「おはようございます」

映未「（思わずビクッとして）あ、おはよ」

新川、畏まった様子で、

新川「最終日、よろしくお願い致します！」

映未「あ、うん…」

○居酒屋 同日（夜）

映未と新川、テーブル席に並んで座っている。

遅れて須藤がやってくる。

須藤「ごめんごめん！仕事長引いちゃって」

新川「あ！遅くまでお疲れ様です！」

映未「…おつかれ」

須藤、映未を一瞬見てすぐ目を逸らす。

× × ×

生ビールのグラスを持った須藤、

須藤「じゃあ、新川ちゃんが新たな職場でも頑

張ってけるように、かんぱあい！」

新川「ありがとうございます！頑張ります！」

新川ジュースの入ったグラス、映未ビールのグラスを持って乾杯する。

落ち着かない映未。

映未、ちらっと須藤を見ると一瞬目が合

うが須藤も何かいつもと違い落ち着かない様子。

須藤「（無駄に大声で）んああ！腹減ったあ！」

新川「何かがつり食べられるもの注文します？」

須藤にメニューを渡す新川。

須藤「あー、そうだな…」

顔を隠すようにメニューを広げる須藤。

新川「唐揚げとか美味しそうですね！」

須藤「（メニューで顔を隠したまま）いいねえ」

新川「ガツンとガリックステーキとか！」

須藤「ガツン！いいねえ！」

新川「一層のこと井物とかいってきます？」

須藤「井物！いいねえ！」

新川「…てかさっちの面でドリンクメニューしか書いてないんじゃないですか？」

須藤「え…？」

慌ててメニュー裏向けて、

須藤「あ！ほんとだ！こっちかあ！」

そして再び顔を隠す。

新川、不思議そうに映未の方を見る。

映未「・・・」

新川「（須藤に）須藤さん、今日どうしたんですか？」

須藤「顔を隠したまま」え？別にどうもしないよ！」

新川「なんか…、変です」

須藤「別に変じゃないよ」

新川、そーっと須藤の持つメニューを下げる。

いつもより表情の硬い須藤。

新川「どうしたんですかっ？」

須藤「どうしたって？何が？」

新川「いつもの須藤さんと違う」

須藤「…別に変わらないよ？」

須藤、ちらっと映未に目をやるがすぐ逸らす。

それを見た映未、ハッとして、

映未「あ、ごめん！ちょっと急ぎの電話思い出した！」

慌ててスマホを持って外へ出ていく。

○店の外 同時刻

映未、店から少し離れた場所へ行き辺りを見回しながら叫ぶ。

映未「ねえ！お願いがあるの！出てきて！」

天使、暗闇からずっと現れ、

天使「はい、6つ目の望みですか」

映未、天使に駆け寄って、

映未「いや、やっぱり須藤に告白させるの取り消して！」

天使「はい、それが6つ目の望みですね」

映未「…そうなるんだ…、キャンセル出来ない

仕様ってこと？」

天使「はい」

映未「わかった。6つ目でいいからお願い！」

天使「わかりました」

タブレットを差し出す。

映未、画面を見てからタッチする。

ピコンとタブレットが鳴る。

天使「受け付けました。とりあえず、5つ目の見返りはキャンセルされました」

映未「そっちはキャンセルになるんだ？」

天使「はい」

映未「須藤に告げせずに済んだから…？」

映未、苛立って、

映未「私ほんっと馬鹿だな。そんな事したら須藤の本当の気持ちがわからないままだって、考えれば分かる事なのに！」

映未、乱暴に頭を抱える。

その時片耳のイヤリングが取れ深い溝に落ちてしまう。

映未「あっ！」

映美と天使、深い溝を覗き込んで、

映未「お気に入りだったのに…。もしかして、これが…？」

天使「6つ目の見返りですね」

映未、片方のイヤリングも外し、

映未「…片側だけじゃ、意味ないもんね」

少し落ち着きを取り戻し店に戻っていく

映未。

○居酒屋 外（夜）

映未、新川、須藤、店から出てくる。

新川「ごちそうさまでしたあ」

須藤「美味かったね！食った食ったあ」

普段通りに戻っている須藤。

須藤「夏丘、今日は呑みが控えめだったな！」

映未をちゃんと見て笑う須藤。

映未「うるさいな（少し安心して）」

○道 同時刻

映未、須藤、新川、3人で歩いている。

須藤「じゃ、明日、新川ちゃんは新しい職場で

初出勤だし、今日は二次会はなしで帰ります

かあ」

新川、須藤と目くばせしてから、

新川「夏丘さん！」

先を歩いていた映未、立ち止まる。

新川「あの、昨日夏丘さんに伝えたい事がある

って言ってた話なんですけど…」

緊張感がピリピリ伝わる面持ちの新川。

須藤「あっ、ちょっとオレ缶コーヒーでも買ってくるかな」

白々しくその場を離れようとする須藤。

映未、須藤の腕を掴んで引き戻す。

須藤「え、え、え、何？」

映未、自分を奮い立たせるように、

映未「それって須藤の事？（声が震えて）」

新川「…え？」

須藤「へ？」

映未「あ、私…、私、須藤の事が好きなの。寝癖頭で入社式に来た時からずっと好きだったんだって気付いちゃったの！だから、この気持ち譲れない。悪いけど誰にも譲りたくない！」

新川「あ…：（映未の誤解に気づく）」

須藤「え？いや、新川ちゃんは…」

新川、須藤を無言で制止する。

映未「…（反撃に対して構える）」

新川「そっか……。そうなんですね。あー、そっかああ（涙を堪えて）あはは、じゃあ、私は身を引くしかないですよ。夏丘さんにはとても敵わないですもん！」

映未「え？」

須藤「ん…？」

新川、堪えていた涙が溢れ出し、

新川「やだ、泣いちゃった。恥ずかしい」

映未「……（予想外の展開に戸惑う）」

新川、決心したように夏丘に向き合い、

新川「私、やっぱり夏丘さんの事が好きだから、

須藤さんの事諦めます（泣笑）」

映未「え……。何よそれ……」

須藤「んん…？（理解が追いつかない）」

新川「だから……」

新川、映未に抱きつく。

新川「一回だけギュってして慰めて下さい」

映未にしがみつき声を殺して泣く新川。

須藤「……（なんとなく状況を理解）」

映未、ただ戸惑う。

新川「夏丘さんが大好きだからあ、仕方ないからあ、諦めます！（号泣）」

映未、ただならぬ様子を感じ取りそっと新川の背中に手を回す。

須藤、泣いている。

○駅の改札前へ道 同日（少し時間経過）

無言で歩いて来る映美、須藤、新川。

改札前、新川、二人に向かって笑顔で、

新川「それでは！また！失礼します！」

手を振りながら改札口を入れて行く新川を見送る映未と須藤。

二人並んで歩き始める。

須藤「なあ、夏丘…」

映未「（遮るように）須藤！」

須藤「へ？」

映未「バーベキューの時、新川さんが須藤に抱きついてるとこ私見ちゃったの。その時からずっと何かに取り憑かれたみたいにモヤモヤしたものがこの（胸の）辺にあって、なんか…

こんな事になっちゃって…ごめん」

須藤「なんで夏丘が謝るの？」

映未「だから返事欲しいとかじゃないの。とにかく言っとかないともう…爆発しそうだったから。私、恋愛の耐性ないし…」

須藤「ありがとう。オレも多分同じ気持ち」

映未、驚いて須藤を見る。

須藤「いやさ、オレもこの年でいまだに恋愛とかっていうのがどういうもんなのかイマイチわかってないっつーか…。…ってか、バーベキューの時ってもしかしてトイレの前での事？」

映未「うん…」

須藤「いやあれはさ、新川ちゃん、貧血で気持ち悪くなって、立ってられなくなったらしくて、それで…」

映未「でもそれも計算かもしれないじゃん」

何やら考え込む須藤。

須藤「……あのさ、夏丘に伝えておきたい事がある。新川ちゃんには言わないで欲しって言

われてただけど…」

映未「・・・」

○恵比寿商事本社 屋上（日中）（須藤回想）

スマホを見てぼんやり立っている新川。

須藤M「新川ちゃん、普段は明るく振る舞ってるけど、前から時々思い詰めた様な表情する時あってちょっと心配だったからさ…」

背中向きの新川に話しかける須藤。

須藤「新川ちゃん」

新川、驚いて振り向き慌てて涙を拭う。

須藤M「やっぱり何か思い詰めててさ、その時に…」

× × ×（少し時間経過）

新川「告白…、しちゃってもいいですか？」

須藤「…え？」

新川「私…、好きだけと思いを伝えられない人がいるんです」

須藤「そうなんだ…」

新川「叶わないってわかってるから、もうほん

とそれが苦しくって…」

須藤「なんで叶わないってわかるの？」

新川、スマホの画面を須藤に見せる。

映未の画像。

（回想終わり）

○道 同時刻

映未と須藤に強めの風が吹く。

映未「…え？」

須藤「…新川ちゃんはお前の事が好きだったんだよ」

映未「…（まさか）」

○恵比寿商事本社 屋上（日中）（須藤回想）

須藤「好きな人って…、夏丘？」

新川「夏丘さんて、サラッと仕事でも何でも出
来て頼りがいあるけど、ちょっと人見知りっ
ていうか、コミュニケーション取るのが苦手
っぽいところか可愛いなあって思って、頼れ
る存在なんだけど守ってあげたくなるみたい
な…。気付いたら何を見ても夏丘さんを思い

出すようになって…。ああ、私、夏丘さんが好きなんだって…」

須藤「…そうだったんだ…」

新川「でも多分、夏丘さんは須藤さんの事が、好きで…」

須藤「え？」

新川「だから、叶わない事だってわかってるんです」

須藤「…」

新川「だけど、毎日仕事にあれば一緒に居られるんで、それだけで幸せだったんです。それだけで毎日心の充電出来てたんで。でも、それももう無理になっちゃって…」

（回想終わり）

○道 同時刻

映未「…」

須藤「健気だよなあ。片思いでもいいからそばにいたいって思ってたんだって。それを仕事だから仕方ねえけど、人事異動ってほんと酷

だよな」

映未、自分のせいだと愕然とする。

須藤「それで俺が新川ちゃんに言ったんだ…」

○恵比寿商事本社 屋上（日中）（須藤回想）

須藤「気持ち、伝えるだけでも伝えてみれば」

新川「そんなの、きっと気持ち悪がられます。

これ以上距離が開いてしまうのは辛すぎます

（涙流して）」

須藤「夏丘は…そんな奴じゃないよ」

新川、須藤を見つめる。（回想終わり）

○道 同時刻

涙でいっぱい目を見開いて須藤を凝視

する映未。

須藤「結果、あんな形になっちゃったけど」

映未「私…どうしよう…」

× × ×（フラッシュ）

新川「明日、夏丘さんに伝えたいことがあります」

新川「夏丘さんが大好きだからあ、仕方ないからあ、諦めます（号泣）」

× × ×

映未、ぎゅっと目を閉じ涙がこぼれる。

○電車内 同時刻

新川、電車の中で窓の外を眺めながら泣いている。

○映未アパート近くの公園 同日 （夜）

一人目を閉じベンチに座っている映未。

天使「見えなかったモノが見えたんですね」

側に立っている天使。

映未「（目を閉じたまま）見えてなかった。ほんと私何にも見えてなかった。須藤には私に見えてないモノが見えてたのに……」

映未、ゆっくり目を開ける。

映未「小学5年の時、3年ぶりに仲良しのあかりちゃんと同じクラスになれてすごく嬉しかった。なのにそのあかりちゃんが私の好きな

佐々木君と仲良く話してるのを見てなんか腹立っちゃってあかりちゃんの事無視しちゃった。悔しくて『私も佐々木君と話したい！』って思ってたら次の日突然佐々木君が話しかけてきてくれて、それをきっかけに佐々木君とは親しく話せるようになったんだけどあかりちゃんとはそれっきり話すきっかけが掴めないままだった」

映未、ため息をつく。

映未「でも実はあの時あかりちゃん、佐々木君に『映未ちゃんっていい子なんだよ』って話してくれてたんだって、後で佐々木君に聞いて、私すっごい後悔して…でもすぐにあかりちゃんに話しかける事も出来なくて…。それに追い打ちかけるように、突然あかりちゃんが引越すって聞かされて…。ショックで落ち込んで…」

映未、ベンチから立ち上がる。

映未「今、また私同じ間違いを犯して同じ後悔してる。小5の頃と何にも変わってない。自

分の事ばかりでちゃんとその人を見てなかった」

天使「もう一つ、見せてあげます」

映未「…え？」

天使「この世には目に見えない大切なモノが沢山あるけど、それを想像出来るヒントも近くにありますよ」

天使はシルバーの小さな羽根型のチャームを映未に見せる。

驚いてそのチャームを手にする映未。

映未「これ…！」

○映未の実家15年前（日中）（映未回想）

すすり泣いている映未（二）

天使M「これは7つの望みを叶え終わった後に渡す物なんです、今回は今渡した方が良いみたいなんで…」

笑顔で映未を励ますきぬゑ（70）

きぬゑ「大丈夫だよ。おばあちゃんがお守りをあげるからね」

きぬゑ、同じ羽根型のチャームを映未
の手の平にのせる。 （回想終わり）

○公園 同時刻

映未「小5の時に立て続けに奇跡みたいに運の
いい事があった…。確実に豪雨予報だった遠
足の日になぜか晴れたり、好きだった佐々木
君と二回続けて隣の席になれたり、それも二
回ともくじ引きで。それと、逃げて飛んでっ
ちゃったインコが家に帰ってきた。これはほ
んと嘘みたいだった」

天使「・・・」

映未「それっておばあちゃんが…？」

その時映未のスマホに幸枝からの着信。

映未「（慌てて）もしもし」

幸枝（電話）「映未、おばあちゃんが…」

映未、青ざめて駆け出す。

○車通りのある道 同時刻

タクシーを探しながら走る映未。

幸枝 M 「おばあちゃんが危篤状態になっちゃって、今夜が山だって。映未、今すぐ病院来れる？」

タクシーを捕まえ乗り込む映未。

○タクシーの中 同時刻

映未 「○○病院までお願いします」

その時また映未のスマホが鳴る。

新川からの着信。

映未 「…もしもし」

新川 (電話) 「夏丘さん、すみません。あの…

(震える声)」

○駅の改札口付近 同日 (夜) (新川回想)

俯いて改札口を出てくる新川。

いきなり後ろから声を掛けてくる男。

男 「ねえねえ、さっき電車ですっと泣いてたで

しょ？大丈夫？話聞くよ？」

新川 「(驚き怯えて) 大丈夫です」

逃げる様に歩く。 (回想終わり)

○道 同時刻

後ろを気にして歩きながら口元を手で覆い小声で電話をしている新川。

新川「適当にスルーしたんですけど、なんか今もついて来てるみたいで、ちょっと怖くて。

…それで夏丘さんに電話してしまったんですけど…」

○タクシーの中 同時刻

映未「(スマホに) 今どこ？」

○道 同時刻

新川「今、家に向かう道なんですけど、今日家に誰もいなくて、それで私このまま帰るのが怖くて」

(以下タクシーの映未と適宜カットバックで。

スマホで会話するタクシー内の映未と夜道を歩く新川)

映未「警察に電話は？」

新川「特にまだ何かされたわけじゃないから」

映未「とにかくどこか人のいる店に入ったりと
か出来ないの？」

新川「ここもう住宅街なんで店がなくて」

映未「そうか…」

新川「なんか近づいて来てる気がする…」

○公園の公衆トイレの近く 同時刻

電話をしながら早足になる新川。

思わず明るい公園のトイレに駆け込む。

新川「（呼吸が荒い）今…、公衆トイレの個室に
とりあえず入ったんですけど…」

（以下タクシーの映未と適宜カットバックで）

映未「公衆トイレか…（顔をしかめる）。その
位置情報知らせて」

新川「はい…」

トイレの周辺で物音がする。

新川怯えて手を震わせながらスマホを
操作する。

新川のすぐ近くで物音がして、

新川「（息を飲む）……！」

映未「どうした？」

新川「誰か近くに来てます。誰かわからないけど。…怖い」

映未のスマホに位置情報が届く。

と同時に震える新川の手からスマホが滑り落ち個室の外に出てしまう。

○タクシーの中 同時刻

映未「オッケー！そっち向うからそこ動かないで。（運転手に）すみませんがすぐ此処に向かって下さい（スマホを見せる）どれくらいで着きますか？」

運転手「あー、15分くらいかなあ」

映未「やっぱり警察…」

映未、ハッとして横を見ると天使が座って居る。

映未「新川さんを…助けられる？」

天使「わかりました」

映未、天使の手元のタブレットを引き寄

せ急いで画面にタッチする。

天使「7つ目の望み、受け付けました」

天使、姿が見えなくなる。

映未「（スマホに）新川さん！大丈夫？」

新川、応答ない。

映未、焦ってタクシー運転手に、

映未「すみません、急いで下さい！」

○公園の公衆女子トイレ 同時刻

女子トイレに入ってくる男。個室前に裏

向きに落ちている新川のスマホ。同系色

で男は気づかない。

男がバンバンとドアを叩く。

男「ねえ？おねーさん、だいじょーぶ？」

個室内で息を飲み、涙目で震える新川。

○公園の近くの道 同時刻

パトロール中のパトカーが新川にいる公

園付近に近づいてくる。

○パトカーの中々外　公園近く　同時刻

助手席の警官Aと運転している警官B。

警官A「なんでこの住宅街入ってきた？」

警官B「ここ通るように指示あったんじゃないか

ったんでしたっけ？」

警官A「え？いつ？」

公園前に黒づくめの人影（天使）。

警官B「ん？あれ、なんかあそこに人がいます

ね」

警官A「何してんだ？」

警官Bパトカーを止める。

天警官A「どうかしましたか？」

天使「さっき、公衆トイレに行こうとしたら、

怪しい男性が女性トイレの方に入って行った

のが見えたんで気持ち悪いなと思って…」

警官A「え？ちょっと君ここに居て」

警官A、警官Bに目配せして公衆トイレ

の方へ向う。

○公園の公衆トイレ付近　同時刻

警戒しながら公衆トイレに近づいていく

警官二人。女子トイレ入口に男の姿。

警官B「おい！何してるんだ！」

警官の姿を見て慌てて逃げ出す男。

警官AB「こら待て！」

警官二人、走って男を追いかけていく。

その様子を影から見ていた天使、ずっと

女子トイレに入る。

○公衆女子トイレ内 同時刻

天使、落ちているスマホを拾い、

天使「新川さん。私、映未さんに言われてここ

来たんですけど、今警察が来て変な男を追

払ってくれたんでもう大丈夫です」

新川、恐る恐る個室のドアを開ける。

天使、個室から覗く新川の手を引っ張り

公衆トイレの外に連れ出す。

○公園近くの道 同時刻（少し時間経過）

タクシーが到着し急いで降りる映未。

その姿が見えて駆け寄る新川。

新川「夏丘さん！」

映未「大丈夫？」

新川「はい、夏丘さんのお友達が…」

新川、振り返るが天使の姿はない。

新川「あれ？さっき一緒に…」

映未「結構ヘビーな格好の女の子？」

新川「はい…」

新川、スマホを持つ手が震えている。

映未、そっと新川の手を握る。

映未「家まで送るよ」

新川「ありがとうございます（涙目）」

映未、そのまま繋いだ手で新川を引っば
っていく。

○タクシーの中 同時刻

無言の二人、手は繋いだまま。

○新川の家（一軒家）の前 同時刻

タクシーが止まり新川が降りてくる。

新川「本当にありがとうございました！」

映未「大丈夫？いつでも連絡してくれていいから」

新川「はい（微笑む）じゃあ…」

新川、タクシーから離れようとして、

映未「…あっ…」

新川「（振り返り）？」

映未「…あの…、私、なんか大人気なくて…、

その…、色々…、ごめん…」

新川、微笑む。

新川「そんなところも含めて、私、夏丘さんの事

大好きなんで」

新川、駆け足で家に入っていく。

映未、何か胸にこみ上げてくる。

映未のスマホに幸枝からの着信音。

映未、我に返り運転手に、

映未「あ、すみません、もう一度〇〇病院へ向かってって貰っていいですか？」

そして、幸枝からの電話に出る。

映未「もしもし、今向かってる。おばあちゃん

の様態どう？」

○タクシーの中 同日（少し時間の経過）

タクシーの中で祖母きぬゑへの思いを馳せる映未。

幸枝M「おばあちゃん、なんとか頑張ってるけど…、とにかく早く来て」

○映未の実家 15年前（日中）（映未回想）

映未（二）が泣きそうな顔で玄関をウロウロしている。

きぬゑ（70）（手の甲に絆創膏）がその様子を心配そうに見に来て、

きぬゑ「えいみちゃん、どうしたの？何か心配事でもあるの？」

映未「もう遅いの！あかりちゃん引越しちゃったからもう無理なの！私が全部悪いの！」

きぬゑ、映未の両手を優しく握り、きぬゑ「えいみちゃん、落ち着いて。諦めないで頑張ったらきっとかなるよ」

○住宅街 同時刻

住宅街を全力で走る映未（二）。

きぬゑM「とにかくあかりちゃん家へ行ってごらん。おばあちゃんがあかりちゃんに会えるようにしてあげるからね」

○住田あかりの家の前 同時刻

中が空っぽのリビングの窓にオデコをくっつけ脱力する映未。

あかり（二）「えいみちゃん？」

後ろから聞こえたあかりの声に驚いて振り返る映未。

うさぎのぬいぐるみを抱いたあかり。

映未「あかりちゃん！」

あかり「えいみちゃん、どうしたの？」

映未「あかりちゃん、もう行っちゃったと思ってた」

あかり「このぬいぐるみを忘れてて…」

映未「あかりちゃん、ごめんね」

あかり「あかりこそごめんね。ちゃんとえいみちゃんと話したら良かったのに……」

映未「ううん、私が全部悪いの。あかりちゃんはずいぶん悪くない！ごめんね！」

あかり「えいみちゃん！」

二人抱き合って泣く。

○映未の実家 玄関 同日

玄関から駆け込んで来る映未（二）

映未「おばあちゃん！あかりちゃんに会えたよ！」

キッチンから幸枝（お）が顔を出す。

幸枝「おかえり」

映未「おばあちゃんは？」

幸枝「おばあちゃん、さっきぎっくり腰になっちゃってね、今部屋で休んでる」

（回想終わり）

○病室 同日（夜）

病室で管に繋がれ眠っているきぬえ。

室内に神妙な顔の幸枝と、映未の父

繁隆（57）がいる。

息を切らして病室に入ってくる映未。

幸枝「映未！」

映未「おばあちゃんは？」

幸枝、頷いてきぬゑの方へ目をやる。

映未、ベッドに駆け寄り、

映未「おばあちゃん！おばあちゃん！私だよ！

映未だよ！」

映未、両手できぬゑの手を握る。

目を閉じたままのきぬゑ。

映未「おばあちゃん…、全部おばあちゃんのお陰だったんだね。あかりちゃんの事も、佐々木くんの事も、遠足の事も、ピーちゃんの事も。見返りで痛い思いしながら私の事ばかり願ってくれてたんだね」

映未の目に涙が溢れこぼれ落ちる。

ゆっくり目を開けるきぬゑ。

映未「おばあちゃん！」

きぬゑ「…えいみちゃん…」

映未「映未だよ、おばあちゃん！」

きぬゑ「えいみちゃん、泣かないで、大丈夫だからね」

映未「・・・（涙が止まらない）」

幸枝「おかあさん！」

繁隆「かあさん！」

きぬゑ「ありがとねえ。みんなありがとねえ」

微笑んだまま静かに目を閉じるきぬゑ。

映未「ありがと！私の事、いつも大切に思ってくれてありがと！（号泣）」

幸枝も繁隆もそばに寄り泣いている。

○葬儀場外 日替わり（日中）

喪服の映未と天使と一緒に歩いている。

映未、羽根型のチャームが2個ついたペンダントをつけている。綺麗なシルバールの物と変色した物。

天使「おばあちゃん、最期に一目会えて良かったですね」

映未「うん。11歳の私に起きた奇跡は全部おばあちゃんのお陰だったんだね」

天使「天使が行くのは本当はおばあちゃんのような沢山徳を積んだ人の所なんですけどね」

映未「そうだよねえ。誰でもってわけにはいかないよね。…じゃあそうなるとやっぱりわからない。なんで私の所に来たの？」

天使「それは…、一応選ばれたからです」

映未「一応って何よ（苦笑）それより7つ目の望みの見返りは何だったの？」

天使「ああ、気づきませんでした？」

映未「え??？」

映未、自分の体にどこか痛い所がないか確かめる。

天使「答えは金銭を失う。です」

映未「え? いつ?」

天使「こないだ乗ったタクシー、メーターの故障で実は少し多めに支払ってます」

映未「そうなんだ! 結構な距離乗ったから気づかなかった…」

天使「望みの内容に沿うのでそんな大きな見返りではありません。とりあえず7つの望みは

叶え終わったのでこれでお別れです」

映未「そっか……。色々ありがとう」

天使「（言葉無くにつこり）」

幸枝「映未！そろそろ時間よ！」

遠くから幸枝の呼ぶ声に振り向く映未。

映未「わかった！」

振り返るともう天使の姿はない。

映未、首の羽根のチャームを握る。

そしてふと思い立ち、スマホを手に取り

新川のラインを開き「また一緒に食事で

も行きましょう」と打つ。

少し考えるが思い切って送信する。

送信したメッセージを届けるように強

めの風が吹く。青く澄み渡る空。

エンドロール（エンディング曲中）

新川綾音目線。

○恵比寿商事入社式会場外へ中 4月（朝）

桜の木の下を入社式会場へ向う新川。

受付で説明を聞く新川がふと顔を上げる

とそこに真剣な顔で話す映未。

そんな映未に何か惹かれる。

会場への入口に向かいながらもふと振り返り他の人の対応をしている映未を見つめる。

○恵比寿商事本社営業部 中 (朝)

勤務一日目、部長に部署の皆に紹介される緊張気味の新川(と、その他)

教育係として紹介されたのが入社式の日
受付で見た映未と気付き心ときめく。

○同 日替わり (日中)

丁寧に仕事内容の説明をしている映未を
目をキラキラさせて見つめる。

○BBQ大会会場 (日中)

血豆が出来た新川の指を見る為、手を掴む
近距離の映未にドキドキする。

男性社員らに囲まれて愛想よく談笑して

いるが、少し離れた木陰で映未と須藤が仲良く笑っている様子に胸を締め付けられる。

○新川の部屋（夜）

ベッドに寝転び映未と撮ったスマホの写真を見つめている。映未の顔を拡大し指で愛しそうになぞる。

須藤和希目線。

○恵比寿商事入社式会場 外／中 4年前

春（朝）

桜の木の下を寝癖のついた髪とちゃんと着れていないスーツ姿で慌てて走っている。

く須藤（22）

会場にバタバタと入り一番後ろの端に座っている映未（22）の隣の席に勢いよく座る。

怪訝そうにチラ見をしている映未に襟元を指摘されるが意味がわからない。

映未が遠慮気味にネクタイがはみ出ている須藤の襟を整える。

「あざーす」と満面笑顔の須藤に髪はそれでいいのか？と聞く映未。

須藤、自分で頭を撫でつけるがびよこんと立ち上がる寝癖。思わず吹き出してしまふ映未。何度やっても寝癖が収まらない様子にツボって笑いが堪えられなくなり声を押し殺しながら笑い合う二人。

その映未の笑顔を見て心惹かれる須藤。

○恵比寿商事本社営業部 2年前（夜々深夜）

電話で話しながら青ざめて何度も頭を下げ謝っている須藤（24）

電話を切った須藤に映未（24）が心配そうに声をかける。

拒む須藤を無視して強引に須藤の席でP Cを操作し始める映未。

映未に一喝され慌てて書類を渡す須藤。

× × ×

時計は深夜を過ぎている。

PCからメール送信を完了させる須藤。

横で見守る映未と「終わった〜」と天井を仰ぐ。

× × ×

缶ジュースを買って戻ると映未は机にうつ伏せになり眠ってしまっている。

映未の背中にそっと毛布を掛けてやる。

そんな映未を見つめながら愛おしそうにそっと髪を撫でる。

エンドロール、エンディング曲、終了後

夏丘きぬゑ目線。

○映美の実家 15年前（日中）

後ろ姿の白い服装の天使と、きぬゑ

（70）が話している。

きぬゑ「最後のお願いは、そうですね。いつかえいみちゃんが困った時にえいみちゃんを助けに、また来て貰えますか？」

天使の顔が見える。

映未のところへ来た天使だが、服装も化

粧も天使っぽい姿。

天使「わかりました。では見返りを選んで下さ

い」

おわり